

津田昇平教話 第三十二話

令和三年二月一日 朝の教話

あれこれと苦にするな。神様をお願いしてい

さえすればよい

おはようございます。令和三年二月一日をお迎えさせて頂きました。
新しい月をお迎えいたしまして、「今月今日でたのめい」という天地書附^{てんちかきつけ}
のお言葉にあるように、「今日」「今」はもちろんのこと、その時その時、
神様と共に生きるということを積み重ねて今日を過ごし、それを積み重
ねて今月を過ごさして頂く。二月になりましたので、一月までのひと月
間のお礼を元にしながら、またこれから新しい信心のお稽古^{けいこ}に、今日一
日、取り組ませて頂きたいと思います。

昨日までは、神様と金光大神様^{こんこうだいじん}と自分、氏子、という縦軸の関係の中
で、金光大神様という存在はどういう存在なのか、神様はどういう思^{おも}ひ

召しで金光大神様を差し向けられたのか、そのことについて少し深めてお話をさしてもらいました。

今日はまあ少し気分を変えまして、教典の中にもいろんな教えがござ
いますけれど、なかなかおもしろいみ教えもございましてね。教祖様の
お広前ひろまえには年配の方、お年寄りの方はもちろんおられましたけれど、幼
い方もお参りに来られました。年頃の男の子や女の子のお参りもござい
ました。その中で、今日は大西秀さんひでっていう方のご理解を一つ、ご紹介
しようかなと思います。

大西秀さんひでっていう方は、金光町こうきうちょうの八重やえというところですね。八重と

いうのはね、金光に川がありますね。里見川さとみがわかな。下淵しもぶちの駐車場をずーつとまっすぐ川沿いに行った辺りですね。あの辺りが八重というところのようですね。教祖様のお広前ひろまえ、立教聖場りつきょうせいじょうのあの辺りまでやったら、十分あったら歩いていけるんじゃないかなと思います。この大西秀さんひでは、その金光町の八重というところに住んでらっしゃって、この時お参りをされたのは十三歳となってますね。

じゃあ、ちょっと読んでみましょう。

大西秀さん、十三歳の頃のお話だと思います。ちなみに九十二歳までずっとご信心されて、教師になられたわけではないですけども、後々のちのち、教徒になられたというふうに残っております。

で、大西秀さんの伝えですけども、

おかたと丸屋のこうさんと私との三人の娘が、

おかたというのは女の子でしょうね。丸屋っていうのは何屋さんでしょうね。丸屋さんっていうところがあるんでしょう。

丸屋のこうさんと、私との三人の娘が、当時、八重^{やえ}で鉄道の切り通しの工事をしていたのを、一緒に見に行ったことがあった。この工事に、内藤という人が子分を五十人

くらい連れて来ていた。

大工さんでしょうね。鉄道の工事をしていたと。そこに内藤さんという人がいて、子分を五十人ぐらい連れてきていたということです。で、

こうさんが、その内藤が好きで大騒ぎをしていた。

その時も、

秀さんはね、

「帰ろう」と言っても、こうさんが「どうしても、内藤の所へ行く」と言っただけ聞いてくれなかったもので、一人置いて帰った。すると、丸屋の勘^{かん}さんが、

勘さんってというのは、こうさんのお父さんのようです。

丸屋の勘さんが、「うちの娘を連れて行って、一人だけ置いて帰るような無茶をするなら、これからは一緒に遊んでくれるな」と、たいへんに怒って悪口を言ってきた。そ

れで、私は腹が立ってしかたがなく、夕ご飯も食べられず、生きてても死んでもいられない気がした。

おかたさんとこうさんと秀さんの三人の娘がいて、その中のこうさんが、工事に來てる内藤って人がかつこよかったんか、好きだということでもう大騒ぎして、「帰ろう、帰ろう」と秀さんは言ったけれども、いやいやもうどうしても私は内藤さんとは行くねん、って言うて聞いてくれなかったと。だからもうしょうがないからってんで、秀さんは帰りたかったんでしよう、先に帰ったと。

じゃあ後でこうさんはまあ一人で行ったんかもしれません。内藤さん

とこにね。工事のところ見に行つて、わーかつこいいわ、キャー言うてたんかもしれませんが。

でもまあ後になって、その丸屋のこうさんのお父さんがやって来て、うちの娘を連れて行つて一人だけ置いて帰るような無茶をするならもうこれからは一緒に遊んでくれるな、と大變怒つて秀さんに悪口を言つてきたと。それはちよつと事情が異なりますもんね。

それで秀さんは、もう私は腹が立つて仕方がなく、晩ご飯も食べられない。もう生きてるんや死んでるんやいられないような、そんな気持ちにまでなつた、と。

そこで、夜になってからお参りして、

教祖様ですね。金光様のお広前^{ひろまえ}にお参りをして、

お願いをした。随分^{ずいぶん}遅かったので、灯^ひがついているだけで
広前^{ひろまえ}にはだれもおられなかった。金光様はもう奥に入
っておられたが、出て来ていただいて、「金光様、今夕^{こんゆう}

この晩ですよ、夕方。

ぜひお願いしなければならぬことがあります。今日このように、

まあ、かくかくしかじかということでしょう。

今日こういうことで、腹が立って腹が立ってたまりません。今夜、私は寝られないほどです」と金光様をお願いしたところ、金光様は、

「腹を立てるな。立った腹は、そこへ置いて帰れ。あれこ

れと苦にするな。神様をお願いしていさえすればよい。
あまり疲れているようなら、ちよつと寝て、それから帰
れ。今晚中には向こうから断りに来る。苦にしくても
よい」と言われた。

私は「本当ですか。本当ですか」と、しつこくたずねた。
それから、心が落ち着くようにお願いして帰り、夕食を
食わずに風呂に入っていたら、勘^{かん}さん方のおばさんが来
て、

この人は勘さんのご主人、こうさんのお母さんでしょうかね

「お秀姉さん、」

お秀、大西秀さんですからね。お秀姉さん言っても自分よりお姉さんと言つよりも、お姉ちゃん、ということやろうね。お秀のお姉ちゃん、つていうことなんでしょう。

「お秀姉さん、今日はお父さんが悪いことを言つて、すまなかつた。腹を立てないでおくれ。あの時は、お父さんが一杯飲んでいたからで、怒らないでおくれ」と断りを

言ってくれた。

それで、お風呂に入っておられたんでしようけどね、秀さんはそれを聞いて、

私はありがたくてありがたくて、東向きの風呂の中でお
ひろまえ
広前のある西の方へ向いて、
こんじん
金神様に

金光様のことですね、

お礼を言った。明けの日からは、勘^{かん}さん

勘^{かん}さん、勘^{かん}さんは怒鳴り込んできたお父さんですね。

勘^{かん}さんはものをやさしく言ってくれた。

【理Ⅱ 大西秀四】

というご理解がありますね。

なかなかおもしろいですね。まあ十三歳の娘さんがさもありなん、ということではあるんですけども、かっこいい人があるっていうことで

キヤーキヤー言って会いに行きたい見に行きたいって言ってね。ま、それはいいんですけれども、秀さんはもう帰りたかったんでしよう。でも帰ろう言っても帰ってくれないっていうので、置いて帰ることになったけれども、ま、そしたらお父さんがえらい怒鳴り込んできたと。

で、私は悪くないのにと思っすてすごい腹が立ったんですね。ほんと金光様のところに夜ですけれども二、三十分かけてお参りをして、随分遅かったから灯はついてるだけでお広前にはだれもおられなかったけれども、金光様が出て来て下さった。

そして、「もう金光様、ちょっと聞いて下さい」と。「ちょっと今日お願いせんといかんことがあります。今日はあんなこと、こんなことがあつ

て、もう腹が立ってもうしゃあないです。私はもう今日もつとて眠れそうにありません。」と、そんな感じでお届けしたんですよ。

そしたら金光様が、「腹を立てるな、立った腹は、そこへ置いて帰れ。あれこれと苦にするな。神様をお願いしていさえすればよい。」

というふうにして、言って下さったんですね。で、「今晩中には向こうから断りにくる、苦にしないでよい」「っていつふうにして、言ってくれたと。

それで秀さんは、ほんまでっか、ほんまでっか言うてまあしつこく尋ねた、ということですけども、まあでもえらいのは、そこからね、また心が落ち着くように自分でもお願いして、そして帰ってお風呂に入って

たら、奥さんの方が来てね、「申し訳なかったね」言つて謝つてくれたんですね。

それで秀さんの心も落ち着いたんでしょう。ありがたくってありがたくって、それまでは悔しい思いやら腹が立つ気持ちがあったでしょうからね。それで金光様のお広前の方に向いて、お風呂の中からでも神様に
お礼申し上げた、ということですね。

翌日、その怒つてた勘さんも優しくものを言ってくれた、ということ
で、まあこれも一安心ということですね。

教典にはね、こういうふうな、一見すると光景が目には浮かぶような、

そういうご理解も残っております。み教えだけで、教祖様が仰った言葉だけ（教典に残っている ※編集者補足）ということもありますんで、そういうのは背景がいよいよ分からんところがありますけれど、こうやって分かりやすく状況が書いてあってね。これも他のみ教えとかやったら、背景とか何も書いてなくてね、教えとしては、

「腹を立てるな、立った腹はそこへ置いて帰れ。あれこれと苦にするな。神様をお願いしていさえすればよい」

という一節だけで、あとはなんにも書いてないでしょうからね。それはそれで仰ったことは確かなんですけれども、どういう背景でこのご理解があったのか、お言葉をお下げ下さったのかっていうのが分からない

ことも多いですから、このようにしてよく分かる状況が書かれているというのはね、お話としても、物語としても、読む方も楽しいですし、よく分かるなと思います。

まあ楽しいんですけども、せっかくですから、ここは信心の勉強ですから、どこを学ばんといかんのんか。私はこうして取次とりつぎする立場でこれを読まして頂きましたらね、秀ひでさんがえらかったなと思うのは、まず二つありますよ。おかげを頂くためのやっぱり基本をきっちり押さえてるんです。十三歳とはいえね。

まず腹を立てたっていうことがあって、腹を立ててため込まずにまず

金光大神様こんこうだいじんのお広前ひろまえ、金光様の広前にお参りをした、ということがえらいですね。

夜と言いましても九時十時じゃなかろうとは思いますが、夏やったらまだ明るいかもしれませんが、まあ冬とかやったら山ですから暮れるのも早いですし、夕食まだ食べてなかった、お風呂っていうぐらいですから、六時ぐらいとか、五時半とかそのあたりかもしれませんね。

まあ五時半か六時ぐらいに家を出発して夕方の六時半ぐらいに金光様のところに着いたと仮にしても、もう真っ暗でしょうね。ほんでまた帰ってお風呂に入って、夕食も食べずということだったんで。それぐらいの時間帯ですから、もう外も暗くなってますから、全く危なくないと

も言えないとは思うんですけども、お提灯ひょうたん片手に歩いてこられたんでしょう。

えらいのは腹が立ったことを、そのまんま自分の中でムカムカしたりとかね、物に当たったり、人にあれこれ言ったり、ため込んだりっていうんじゃないかって、それを素直に神様のところに持っていて、聴いて頂いたというところが、これが一つえらいことかなと思いますね。お参りをしたっていうところがね。お参りをして、そしてお届けをされたんですよね。

で、そのお取次の中身も、「腹が立って仕方がない、もう眠れません」ということだったりしますから、それをもうそのまんま十三歳の娘さん

が金光様に申し上げたんでしよう。飾らずにね、もうありのまんまの姿でお届けされてますよね。

教祖様の違うご理解の中にも、「神様と言いましても肩肘張らずに親にものを言うように話をしたらそれでよろしい」というご理解もございませぬ。学校から帰ってきてね、「今日あんながあってな、こんながあってな」っていうふうにして話をするのとおんなじですよ。

それと同じように神様のお広前だし、金光大神様のお結界けっかいだし、ありのまんま、「こんなんであんなんで、もう腹が立ってしょうがないです」言つて、飾らずに正直にお話しをされたというところ、これすごく大事なところですね。

お結界に来て、改まる心がないわけじゃないとは思うんですけど、あんまりガチガチになって、お届けすべきところ、申し上げるべきところを申し上げないと、結局隠しごとになりますよね。それでは神様に入って頂けない、入ることができなくなっちゃいます。そしたらそこからまためぐりが出てきたり、難儀が出てきたりってするもんなですよ。

だからどんなところでも、「陰^{かげ}ひなだの心を持つなよ」って教えもあるんですけどね、神様には見せない、表と裏って言ったらそうですね、自分の中の裏の部分やらそういうところも、人には言わんでもいいんで、神様には申し上げるようにしたらおかげになってきますから。飾らずにありのまんまでお届けをされたということ、これはえらいですよね。

この二つ。ため込まずに神様のお広前にちゃんとお参りをしたということ。そして飾らずにお届けをお結界けっかいでされたということ。

で、お取次を頂いて、金光様はどう仰ったかいったら、「立った腹はここに置いていきなさい」と。ここっていうのはお広前ですし、お結界でお取次しながら聴いて頂いたわけでしょうから、「もうそこへ置いて帰りなさい」と言つのはお結界とも言えるし、お広前、神様のところ、とも言えますし、ま、どっちもおんなじことですけどね。ここは金光様のみ教えとして、私は大事にすべきやと思います。

ま、腹を立てるなって言っても、それはなかなか難しいですけども、でも「立った腹は置いていきなさい」と。「ここに置いていきなさい」と。

腹の立つところをお結界で神様に金光大神様に聴き届けて頂いて、そして神様おかげ下さるから、だから、腹は立つ気持ちはもうここに置いて帰りなさいと。もうあれやこれやと苦にせんと、神様をお願いしてたらそれでよろしい、と。ちゃんの良いようにしてくれはるから、というご理解ですよね。

これ応用で考えましたらね、今回は喜怒哀楽の「怒」ですわね。腹が立って怒ってるんですから。でもこれだけじゃなくってね、嬉しいことでも、「こんなことがあって嬉しかったです、ありがとうございます」でもいいし、悲しかったら、「もうこんなことがあって、もう耐えられないく

らいもうつらくて悲しくって……」ってそれも聴いて頂いたらいいし。
楽しいことがあったら、「こんな楽しいことがあってほんとにありがたか
ったんです、もう神様ちよっと聞いて下さい」でもいいしね。

自分の中の喜怒哀楽ですよね。起こってきた事柄に対して、嬉しい、
悲しい、つらいや楽しいや、まあこういった感情ですよね。嬉しいこと
やったらお礼申し上げたらいいし、腹が立つことやら悲しいことやっ
たら神様にまたお願いすればいいし、嬉しい楽しいは、お礼申し上げたら
いいし、それを飾らずに、そのまんまお届けをさしてもらおうということ
は、やっぱり大事ななあと思いますね。

で、「お願いしたらそれでよい」と仰ったんです。そしたらえらいのは、
またそこでお願いして、「心が落ち着くようにお願いした」って書いてま
すね、大西秀^{ひで}さんは。

そう思うとね、参拜、御^ご祈^き念^{ねん}、御^{おん}取^{とり}次^{つぎ}っていうのがやっぱり基本なんです
よね。これは、おかげを頂くためのやっぱり王道なんですよ。

じゃあこの秀^{ひで}さんは、どうやっておかげを頂くことになったかと言っ
たら、まずお参りをしましたね。わざわざお参りをしました。ちょっと
暗いところがあってもお届けせずにはおれんと思ったんでしょう。お参
りしようと思って、まずお参りをしました。これが一つ、ポイントです

ね。

次、お取次とりつきを頂いた。しかも肩肘張かたひじらずに、飾らずに、ありのまんま、

神様に壁を作らずに、親に物を言うように、「こんなん、あんなんで」
って、ありのままをお届けをされましたね。こうしてお取次を頂いた。

お取次の中身も、聴いて頂けただけじゃなくって、「腹を立てずに、立った腹はまあここに置いて帰りなさい」と。で、「神様にお願いさえしてたらそれでいいから」というご理解も頂いた。これで、参拝、お取次はありますね。

で、最後、ご祈念のところも、心が落ち着くように、とお取次を頂いてね、神様に言って頂いた通りに心が落ち着くようにして、そしてお願い

して帰ったということ。

これ、参拝、御祈念^{ごきねん}、御取次^{おんどりつぎ}って、三つきっちり揃^{そろ}ってますよね。

こうして三つの、おかげを頂くためのほんとに王道やと思いますけれども、これをしっかりおさえられたというところが、やっぱり結局おかげを頂くことになった。相手の方も謝ってきたし、お母さんからね。で、自分の気持ちも晴れたし、その後も次の日も、あちらのお父さん、いまだに怒ってはるわと思ったら嫌ですけどね、物もやさしい言うてくれはって、ちょっと反省されたんかもしれませんね。

そう思ったら秀さんとしては、人間関係で難儀が起こったんですね。

ど、でもしっかりとお参りして、お取次とりつぎ頂いて、そしてご祈念ごのりさして頂いて、その通りにおかげを頂きましたね。願った通り、願った以上かもしれません。そのようにして、やっぱりおかげを頂いた。

おかげを頂くには、おかげを頂く信心がありますんで、生きるか死ぬかの問題ではないにしても、でも、この女の子にとったら、もう夜も眠れない、もう腹が立ってどうしようもないという、それぐらいのことです。大きい小さいの区別はなくね、何でも神様すがたにお願いして、お縋すがりして、おかげを蒙こうらしてもらうのが大事ですから。そういう意味じゃ、秀さんはえなかったなあ。ちゃんとお参りもしたし、お取次とりつぎも頂いたし、

そしてご祈念もしたし。「十三歳にもなったらね、自分で信心しておかけを頂くということ覚えていかんといかん」というふうにして、教祖様がまた違う方にお話しをされてるご理解も残ってますけど、こうして、その通りに信心をなさったんやなあ、と。だから神様のおかげを頂ける器ができたんやなあと思いますね。まあそういうことです。

これは大西秀^{ひで}さんの話ではありませんけれども、基本の基本ですよね。自分自身の身の上で何か起こったら、まず参拝さしてもらおう。遠方の方はすぐというわけにいきませんけれども、お参りができるのであればお参りをさして頂いて、そしてお取次^{とりつぎ}を願^ねうて、頂いて、そして頂いた

み教えを心にかけてながら、お願いして、過ごさしてもらっていく。

お広前^{ひろまえ}出てからも大事ですよ。お広前出てからも、教えて頂いたことを心にかけてながら、お広前だけでお願いするんじゃないかって、歩きながらも神様にお願いしたり、ここまでのことをお礼申したり、お断り申したりはできます。

信心は何も他に要りませんからね。肉体さえあれば、それでできます。いつでもどこでも何してても、信心はできます。肉体がないとできませんけど、肉体があれば信心はできますから、お風呂に入っていようがね、最後はお礼申すのにお風呂の中から、お広前に向かってお礼申して、そこで信心されてる。服も着てなくなっただけでできますもんね、お

風呂に入ってもね。

これが、信心のお稽古けいこのありがたいところで、いつでもどこでも、何を
していても、神様に心を向け、金光様の御取次おんとりつき、み教えを心につけなが
ら、心を神様へ向けて信心なさったら、そしたらやっぱりおかげは頂け
るなあと思います。

私としては、このご理解は、参拝、御祈念ごきねん、御取次おんとりつきという鉄則をふまえ
たら、やっぱりおかげを頂けるなあ。このくらいと言っても、大きい
小さい区別はないんですけれども、命かが懸かる懸からんというほどのこ
とではないのは確かです。けれどもこれぐらいのことであれば、しっか

り参拝して、ご祈念して、お取次頂いたら、そらすぐにおかげ頂けると
思いますよね。

まあそういうおかげを頂くには、おかげを頂けるような信心をさせて
頂かんといかんなあ。それをした大西秀さんはえらかったなあ、とい
うことを思いました。

今日は今日で、神様から新しい一日を頂いておりますので、どうぞそ
れぞれに自分自身の年頭のみ教えがあるかと思えます。頂いた年頭のみ
教えを心につけながら、今日は今日で朝のお話を聴いて、それをまた心
につけながらね、あるいは自分自身が今取り組んでるお稽古があれば、

それも心にかけてながら、自分自身の心を神様に向けながら、過ごさせてもらえるようにお稽古をさせて頂きましょう。よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第三十二話

令和三年二月一日 朝の教話

令和七年六月十七日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五
